

元朝秘史の成立

岡田英弘

『元朝秘史』卷一、六一—六六節に、イエスゲイ・バートル Yesigei ba'atur が、九歳のその子テムジン Temüjin を連れて、妻ホエルン・エケ Hö'elün eke の里方オルフヌウト Olqunū'd の民に嫁を求めに行く途中、チエクチエル山 Čeg'er とチフルフ山 Čiqurqu の間にウンギラト Unggirad のデイ・セチエン Dei sečen に出遇い、その勧めに従って、十歳のボルテ Borte とテムジンを婚約せしめる次第が説かれている。その中でデイ・セチエンは、前夜に見た、白い海青シシホヤが日月をつかんで飛んで来て自分の腕にとまるといふ吉夢を語り、「我等の男兒たちは牧地を見張るものである。我等の女兒は美貌を眺められるものである」 nu'un kö'üd manu nuntuy qarayu. ökin kö'in manu öngge üjegdevü. と云って、女子を王者の后妃に奉じて権勢を保つ、ウンギラトの平和な伝統を強調するのである。次に引用するのは六四節の全文の、文語に近づけた転写である。

ba ungrirad irgen, erte üdür-eče je'e-yin jisün ökin-ü önggeten, ulus ülitü temečed.
qačar yo'a ökid-i

qahan boluγsan-a tanu

qasaγ tergen-dür unu'ulju

qara bu'ura kölgeju

qatarau'ulju odču

qatun sa'urin-dur

qamtu sa'ulumu.

ba ulus irgen tili temečed. ba

öngge sayıd

ökid-iyen

öskeju

öljügetei tergen-dür unu'ulju

öle bu'ura kölgeju

e'üskeju odču

ündür sa'urin-dur

öre'ele ete'ed sa'ulquı.

ba er ten-ěce unğır ad irgen, qatun qalqatan ökid öcilten, je'e-yin yisün ökin-ü öngge-ber bul'e ba.

この頭韻を踏んだ繰り返しが多い文章をなるべく忠実に意識すると、次のようになる。

我等ウングラトの民は、昔の日々から「甥の容貌、女子の色彩」(外戚たるの光榮)を有する者どもであり、国を争わない。

頬の美しい娘たちを

汝等がハーンとなった時に

二輪車に乗せて

黒い牡駱駝に牽かせて

速歩で走らせて行つて

后妃の位に

一緒に坐らせる。

我等は国や民を争わない。我等は

色の美しい

自分の娘たちを

育てて

蓋いのある車に乗せて

灰色の牡駱駝に牽かせて

出発させて行つて

高い位に

傍の方に坐らせる。

我等は昔から、ウングラトの民は、「后妃を盾とする者ども、娘たちによって奏上する者ども」であり、「甥の容貌、女子の色彩」によつてかくあつたのだ、我等は。

この一段の説話は、『元史』にもラシード・アル・ディーンの『集史』にもないもので、『元朝秘史』の創作であろうが、とにかくこれによれば、ウングラトの民は古来、自ら覇権を求めて他と争つたことがなく、他の氏族——この場合はモンゴルのキヤン *Kiyan* 氏族——にハーンが現れるたびに、自らの美しい女子を后妃として納れて、帝室の外戚としての特権を享受することによつて繁栄し來つた平和な民だ、ということになる。

ところで、テムジン、即ちチンギス・ハーンが九歳ということは、もし『元史』太祖本紀に従つてその丁亥（一二二七年）の死が六十六歳であつたとするならば、この説話の年紀は一二七〇年ということになる。チンギス・ハーンの生誕の年には諸説があるが、いずれにせよ十二世紀の後半を背景とする説話に相違ない。しかし、ウングラトは、十二世紀において、果して『元朝秘史』の語るような平和な民だったのであろうか。

ウングラト（またはフングラト *Qungirad*）が初めて歴史に登場するのは一二二二年のことである。この年、遼の耶律大石は金兵を避けてモンゴル高原に逃れ、トーラ河畔の可敦城に七州の契丹人と十八部の遊牧民を集めて自立して王となつたが、その十八部の三番目に数えられているのが王紀刺である。⁽¹⁾

金代に入って、内族宗浩は一一八九年に章宗が即位すると出でて北京留守となったが、北方に警があつたので、宗浩は命ぜられて金虎符を佩びて泰州に駐し、便宜に事に従うこととなつた。朝廷は上京等路の軍万人を發してもつて成らせた。宗浩は糧儲がまだ備わらず、かつ敵がまだ敢て動かないことを度つたので、遂にその軍を分かつて食に隆・肇の間に就かせた。この冬は果して警がなかつた。北部の広吉刺 Qungirad なるものは尤も桀驁で、しばしば諸部を脅かして塞に入った。宗浩は、その春暮、馬が弱いのに乗じてこれを撃たんと請うた。時に阻鞮 Kereid もまた叛した。内族襄が省事を北京に行つたので、詔してその事を議せしめた。襄の意見は、もし攻めて広吉刺を破れば、則ち阻鞮は東顧の憂がなくなるから、これを留めてその勢を牽制する方がよい、というものであつたが、宗浩は奏して「國家は堂々の勢をもつてして小部を掃滅する能わず、かえつて彼を籍りて捍ぎとしようというのか。臣は請う、先ず広吉刺を破り、然る後に兵を提げて北のかた阻鞮を滅ぼさん」と。章が再び上られて、これに従うことになり、詔して宗浩に論して「まさに北部を征せんとするは、もとより卿の誠である。更に宜しく意を加うるべく、後悔を致すことなかれ」と曰つた。宗浩は、合底忻 Qatagin と婆速火 Bosquir 等が相い結んでいることを覗い知り、広吉刺の勢は必ず分れるであろう、彼はすでに我に討たれることを畏れ、また仇敵に掣肘されているから、則ち理として必ず降を求めべく、呼びて致すべきであるとして、因つて主簿撤を遣わして、軍二百を領して先鋒たらしめた。これを戒めて「もし広吉刺が降れば、就ちその兵を徴してもつて合底忻を囚るべく、仍りて余部の所在を偵つて速かに來報せしめよ。大軍は当に進んで汝と撃たん。これを破らんこと必せり」と曰つた。合底忻とは山只昆 Saiyand とともにみな北方の別部であつて、強を恃んで中立し、

羈属するところなく、阻鞅・広吉刺の間に往来して、連歳の擾辺はみな二部がなすところであった。撒が敵境に入ると、広吉刺は果して降ったので、遂にその兵万四千騎を徴し、馳報してもって待った。宗浩は北進し、命じて人ごとに三十日の糧を齎さしめ、撒に報じて移米河に会して共に敵を撃たしめようとした。ところが遣わすところの人が誤って婆速火部に入り、これに由って東軍は期を失した。宗浩の前軍は忒里葛山に至って山只昆の統ぶるところの石魯・渾灘の両部に遇い、撃つてこれを走らし、首千二百級を斬り、生口・車・畜を俘にすること甚だ衆かった。進んで呼歎水に至り、敵の勢は大いに蹙まった。ここにおいて合底忻部長白古帯・山只昆部長胡必刺、及び婆速火の遣わすところの和火なる者はみな降を乞うた。宗浩は詔を承けて諭してこれを釈した。胡必刺は因つて言った、「所部の迪列土 Jalayir は近く移米河に在り、偕に降るを肯んじない。乞う、これを討たんと。すなわち軍を移して移米に趨き、迪列土と遇つてこれを撃ち、首を斬ること三百級、水に赴いて死する者が十の四五で、牛・羊を獲ること万二千、車・帳はこれに称った。合底忻等は大軍の至るを恐れて、西のかた移米を渡り、輜重を棄てて遁れ去った。撒は広吉刺部長忒里虎と追躡してこれに窟里不水に及び、縦撃して大いにこれを破った。婆速火九部の斬首されたり水に溺れて死んだ者は四千五百余人で、駝・馬・牛・羊を獲ること、勝^(と)げて計るべからず。軍が還った。婆速火は内属を乞い、并せて吏を置かれんことを請うた。上は優詔して褒論した。

こうした史実から見て、十二世紀のウングラト／フングラトが、平和の伝統から程遠く、外モンゴル東端に蟠居して、境を接する金帝国の頭痛の種であったことが明らかである。それなのになぜ『元朝秘史』は、この桀驁なる種族を、国や民を争わない、「甥の容貌、女子の色彩」を有する、「后妃を盾とする者ども、娘たちによつて

奏上する者ども」と呼んだのであろうか。

実は『元朝秘史』のこの表現は、チンギス・ハーンのモンゴル統一以前のウンギラト／フンギラトではなく、その孫フビライ・ハーンの登極以後のこの氏族にのみ適合するものなのであり、これによって『元朝秘史』の成立の事情が窺われるものなのである。

チンギス・ハーンの多くの后妃のうち、フンギラトのボルテ・フジンはケルレン河上コデエ・アラルの大オールドを守り、ケンテイ山中サアリ・ケエルの第二オールドを守ったメルキト Merkid のフラン・ハトン Qulan qatun、トーラ河上ハラ・トンの第三オールドを守ったタタル Tatar のイエスイ・ハトン Yesüi qatun、ハンガイ山中の第四オールドを守ったその妹イエスケン・ハトン Yesüken qatun と共に、最も高い地位を占めていたことは間違いない。ボルテの生んだジョチ Jöci、チャガタイ Čayatai、オゴデイ Ögödei、トルイ Tolui の四子が、チンギス・ハーン家の嫡流となったことも確かである。

デイ・セチェンの子アルチ・ノヤン Alči noyan¹⁾、丁酉の歳（一二三七年）、「弘吉刺 Qunggiradai²⁾、女を生ませば世々以て后と爲し、男を生まば世々公主に尚せん」という旨を受けた。この丁酉はオゴデイ・ハーンの治世であるが、当のオゴデイ・ハーンにはフンギラト氏出身の后妃はなく、ただアルチの孫納合がオゴデイの女唆児哈罕公主に尚したことが知られるのみである。オゴデイ・ハーンの子グユク・ハーンにも、フンギラト氏の后妃の存在は伝えられていない。

むしろフンギラトとの婚姻に熱心であったのは、ジャライル、フンギラト、イキレス、ウルウト、マングト等

の左翼万戸の兵を率いて漢地の経略に当たったトルイの一家であった。アルチの子幹陳はトルイの女也速不花 Yesü buga 公主に尚している。⁽⁵⁾これだけでは「甥の容貌」はあっても、「女子の色彩」があるとは謂えないが、トルイの長子モンケ・ハーンの貞節皇后忽都台 *Qutuqtai は、アルチの従孫忙哥陳の女で、その崩後、妹也速兒 *Yesü が継いで妃と為っている。⁽⁶⁾これが事実上、「女子の色彩」の最初の例であるが、フンギラト氏の宮廷における外戚としての地位が確立したのは、モンケの弟、世祖フビライ・セチェン・ハーンの昭睿順聖皇后察必 *Cabui の出現のお蔭であった。

チャバイ・ハトンはアルチ・ノヤンの女であった。⁽⁷⁾その姉テムルン Temülin はジャライルのムハリ国王の孫バートル Ba'atur の夫人である。⁽⁸⁾バートルはフビライの即位以前からその先鋒元帥として戦功を立てた人で、フビライに勧めて燕京に都せしめたことは有名であるが、フビライの即位の翌年、一二六一年に卒した。⁽⁹⁾フビライが一二六〇年、開平においてハーンに推戴されたのも、一二六四年に及ぶその弟アリク・プガとの抗争に勝利を取めたのも、ジャライル部族に統率される左翼の精銳の支持があったからであることは勿論であるが、ジャライル自体は、その昔、チンギス・ハーンの六世の祖ハイド・ハーン Qayidu qayan に征服されてより、代々チンギス家の家奴 yury-goroi の身分を有し、主家と婚姻を通すべき地位になかった。⁽¹⁰⁾そのためフンギラトが間に立って、チンギス家とジャライル家を結びつける役目をしていたのであって、テムルン、チャバイ姉妹はその一例である。

しかし、チャバイ・ハトンの出現をもって、直ちにフンギラトの宮廷における独占的地位の確立とすることはできない。フビライの皇后としては、第二オールドを守ったチャバイ皇后の外にも、大オールドを守ったテグルン大

皇后**Tegülin*、第三オールドを守ったタラハイ皇后**Taragai*、ヌハン皇后**Nugan*、第四オールドを守ったバヤウジン皇后**Bayajün*、ココルン皇后**Kökölin*等があった。⁽¹¹⁾これらのハトンたちの出自は判明しないが、フンギラトでなかったことは確かである。フンギラトの外戚としての権勢の確立は、チャブイ・ハトンの所生のチンキムが皇太子に選ばれ、チンキムの子孫から元の諸帝が輩出するようになってからのことである。そしてそれにはかなりの曲折を要した。次にそれを跡づけて見よう。⁽¹²⁾

ジャライルのバートルの長子アントンはフビライによって宿衛の長とされ、僅か十七歳で位は百寮の上になつたが、これは妹の縁で宮中に自由な出入を許されていたその母フンギラト氏テムルンのお蔭であつた。⁽¹³⁾そしてこのアントンは、中書省の中心人物として、フビライの政権の内部で重要な役割を演ずるのである。

フビライには十人の皇子があつたが、そのうち長子ドルジ*Dorji*、次子チンキム*Cinkim*、三子マンガラ*Mangala*、四子ノムガン*Nomuyan*の四人はチャブイ・ハトンの腹から生れた。ドルジは夭折し、事実上の長子はチンキムであつた。

フビライは開平における即位の直後、何よりも先に中書省を立て、王文統を平章政事に任命したが、⁽¹⁴⁾この中書省は先にオゴデイ・ハーンが耶律楚材を中書令として設立したものと別で、⁽¹⁵⁾フビライを支持する漢人軍閥の合議機関である。⁽¹⁶⁾これは漢地における建国の当初には必要な措置であつたが、漢人の知識人たちは、軍閥に反撥して皇子チンキムの周囲に結集した。⁽¹⁷⁾一二六一年、フビライ・ハーンはチンキムを燕王に封じて中書省の事を領せしめた。⁽¹⁸⁾これは知識人たちの勝利であつた。一二六二年、漢人軍閥の筆頭、益都の李璿が叛して鎮定されると、

燕王チンキムは守中書令となり、翌年、中書省が民政機関に改編されて、軍政系統が樞密院として独立すると、チンキムは守中書令のまま判樞密院事を兼ねた。⁽²⁰⁾一二六五年に至り、ジャライルのアントンが二十一歳の若さで中書右丞相に任ぜられた。⁽²¹⁾こうしてフンギラト系のチンキムとアントンという従兄弟が国政の中樞を掌握したのである。

これと時を同じくして、アフマド Ahmad の権力が強くなりつつあった。アフマドはシル・ダリヤ河畔のバナークアの出身で、チャバイ・ハトンの父、フンギラトのアルチ・ノヤンの家臣であった。⁽²²⁾財政に明るいアフマドはフビライの信任を受け、帝室直営の鋳工業など企業の経営を担当した。アフマドは一二六二年、命ぜられて中書左右部を領し、諸路都転運使を兼ねたのを手始めに、着々と勢力を伸ばし、一二七〇年に至ると特にアフマドの為に尚書省が設立されて、その平章政事に任ぜられた。⁽²³⁾これら中書省、樞密院、尚書省に加えて、一二六八年には御史台が設置され、⁽²⁴⁾国政の最高機関が完備したので、一二七一年、新たに大元という国号が制定された。⁽²⁵⁾

こうして成立した元朝の国制には、モンゴル民族特有の個人主義的色彩が濃厚であつて、中書省はチャバイ・ハトンの姉の子であるアントンに属し、樞密院はチャバイ・ハトン所生の燕王チンキムに属し、尚書省はチャバイ・ハトンの家臣のアフマドに属している。そうした実情から言えば、元朝はチャバイ・ハトンを中心とするフンギラト政権であると定義してもよろしかろう。ただその中、血縁で結ばれている中書省、樞密院とは違い、アフマドの尚書省はやや結びつきが弱い。この点を考慮してか、一二七二年には、尚書省が中書省に併合されるといふ形式をとって、アフマドは中書平章政事となり、財政のみならず民政にも関与することができるようにな

つた。⁽²⁶⁾

チンキムはこれまで燕王であつて、燕は国都の所在ではあつたけれども、この封号はそのまま嗣君の位を示すものではなかつた。しかし大元の国制の完成は、その中核たるチャブイ・ハトンの地位をも安定させた。その表現として、一二七三年、フビライ・ハーンはチャブイ・ハトンに皇后の玉冊と玉宝を、チンキムに皇太子の玉冊と金宝を授けた。⁽²⁷⁾

こうして皇太子チンキムが出現したのではあるが、元来モンゴルの伝統では、ハーンが自己の後継者を生前に指名する権利はなく、あくまでも死後に召集されるクリルタイにおいて後継者が選挙されるべきものであるから、皇太子の称号とはいつても、それはフビライ・ハーンの希望の表明以上のものではない。チンキムの弟たち、マンガラとノムガンも同等の帝位継承権を持っていたのである。マンガラは一二七二年、安西王に封ぜられて、フビライの即位以前からの分地である京兆と、六盤山のチンギス・ハーンの旧営を領し、一二八〇年に死んで、その子アーナンタAnandaが安西王を継いだ。⁽²⁸⁾

この頃のフビライ家の元朝の最大の問題の一つは北辺の防衛であつた。皇子ノムガンは一二六六年、北平王に封ぜられて、漠北の統治を担当していたが、一二七五年、オゴデイ・ハーンの孫ハイドQaiduと、チャガタイ・ハーン・ドワDavaの連合軍が帝国の西境に侵入して、ウイグル王国を攻撃したので、北平王ノムガンは中書右丞相アントンと共に、元軍を率いて防衛に赴いた。⁽³⁰⁾ところが一二七七年、駐營地のイリ河畔アルマリクにおいて、従軍中のモンケ・ハーンの四子シリギスSihiqiが叛いて、ノムガンとアントンをハイドの軍に引き渡した。⁽³¹⁾二人が放

免されて帰国できたのは、七年後の一二八四年のことである。⁽³²⁾この事件のお蔭で、皇后チャブイ・ハトンの所生の四子のうち、帝位継承の候補者として残ったのは、事実上、皇太子チンキムだけとなった。

一方、チンキムの地位は着々と固まり、一二七九年には、六十五歳の老父フビライ・ハーンは詔を下して皇太子燕王をして朝政を参決せしめ、凡そ中書省、樞密院、御史台、及び百司の事は、皆先ず皇太子に啓して後に上聞せしめた。⁽³³⁾

一二八一年、チャブイ皇后が崩じた。⁽³⁴⁾皇太子チンキムとアフマドの結節点であった皇后が居なくなつたのであるから、両者の衝突は必至であつた。果せる哉、翌一二八二年、皇太子の従者の益都の千戸王著が、東宮の前でアフマドを殺した。⁽³⁵⁾この事件とともに、チンキムと肩を並べる権臣は居なくなり、この年、新たに征服された南宋の故地のうち、江西等処行中書省は皇太子位に隸し、⁽³⁶⁾一二八四年、ジャライル、フンギラト、ウルウト、マンガト、イキレスの五投下の探馬赤軍は俱に東宮に属することとなつた。⁽³⁷⁾ノムガンとアントンが七年の虜囚から解放されて元廷に帰つたのはこの年である。

かくしてチンキムの独裁権が事実上確立し、江南諸道行御史台の監察御史がフビライ・ハーンに皇太子への禪位を奏請せんとするまでに至つたころ、一二八五年、皇太子チンキムは急死した。⁽³⁸⁾四十三歳であつた。チンキムは皇太子妃バイラム・エゲチ Bayiram egeci 一名ココクチン Kökegin との間にカマラ Kamala、ダルマパーラ Dharmapala、テムル Temür という三子を生んだが、⁽⁴⁰⁾バイラム・エゲチもフンギラト氏の出身であり、一方、チャブイ皇后の死後は、やはりその一族、フンギラトのアルチ・ノヤンの子ナチン Nacin の孫セントン* Sentin の女ノ

ンブイ・Nombun(皇后)がフビライ・ハーンの正宮を守っていたから、皇太子チンキムが在世中に蓄積した東宮の富は保全されたのである。

フビライ・ハーンは、チンキムの三人の遺児のうちダルマパーラを最も寵愛したが、ダルマパーラは一二九二年、二十九歳で死んだ。⁽⁴³⁾そこでフビライは雲南に出鎮していた梁王カマラを晉王に改封し、北辺に移鎮せしめ、チンギス・ハーンの四大オルド及び軍馬、達々の国土を統領せしめた。⁽⁴⁴⁾こうして漠北の地は、ノムガンの手からその甥に移ったのである。⁽⁴⁵⁾続いて翌一二九三年、フビライはテムルに皇太子の宝を授け、兵を北辺に総べしめた。⁽⁴⁶⁾翌年、フビライ・ハーンは八十歳で崩じた。ここに及んで、帝位継承権があるのは、二人の皇孫、晉王カマラと燕王テムルの二人だけであったが、上都で開催されたクリルタイで、先に南宋を征服し、近くはハイドを防いで功労のあったバアリンのバヤンBayanが軍隊を代表してテムル擁立の意志を明らかにしたので、母のバイラム・エゲチが「受命于天既寿永昌」の玉璽をテムルに授けて皇帝の位に即かしめた。⁽⁴⁷⁾これが成宗である。ここに至って始めてフングラト氏所生のハーンが登位したわけであるが、これだけでフングラト氏の宮廷における権勢が確立したのではない。大事なのは故皇太子チンキムの膨大な遺産の行方である。

チンキムの死後も、その財産は東宮の詹事院が管理していた。成宗は即位後、直ちに母に皇太後の称号を奉り、その居所の旧太子府(東宮)を隆福宮と改め、詹事院を徽政院と改めた。⁽⁴⁹⁾隆福宮は大都の皇城の西南隅に位置し、皇帝の居所の宮城に匹敵する一大宮殿群である。⁽⁵⁰⁾徽政院は膨大な機構を擁し、隆福宮の全国にわたる領地、領民を治め、独自の軍隊まで持つ、政府の外の政府というべき存在であった。⁽⁵¹⁾

一三〇〇年、隆福宮皇太后バイラム・エゲチが崩じた。⁽⁵²⁾一三〇二年、晉王カマラが薨じた。⁽⁵³⁾カマラとフンギラト氏の妃ブヤン・ケルミシユBuyan kelmisとの間に生れたイエスン・テムルYesün temürが晉王を嗣いで、チングス・ハーンの四大オールドの主となった。⁽⁵⁴⁾

一方、成宗にはフンギラト氏の皇后シリランダリ*Sirindariがあり、その生む所の皇子デシユク*Desükは一三〇五年、皇太子に立てられたが、その年の内に薨じた。⁽⁵⁵⁾成宗には他に皇子はなく、權勢を振ったのはバヤウト氏の皇后ブルガンBulγanであつた。⁽⁵⁶⁾

一三〇七年、成宗オルジェイト・ハーンは崩じた。ブルガン皇后は監国の權限をもつて安西王アーナンダを迎立しようとした。アーナンダの母の出自は不明であるが、恐らくバヤウト氏だったのであろう。フンギラト派はダルマパーラの次子アーユルパリバドラAyurparihadraに率いられてクーデターを起し、ブルガン皇后、安西王アーナンダ等を殺し、懷寧王として北辺に駐していたダルマパーラの長子ハイシヤンHayšanを迎えて帝位に即けた。これが武宗である。武宗は弟の迎立の功を謝してアーユルパリバドラを皇太子とした。この間、裏でいろいろな取引のあつたことは勿論で、結局、兄弟の子孫が交代で帝位につくという約束ができた。⁽⁵⁷⁾

フンギラト派がダルマパーラの遺児を擁立したのは、彼等の母ダギ*Daγiがフンギラトのアルチ・ノヤンの孫フンド・テムル*Qundu temürの女だつたからである。武宗は直ちに生母を皇太后として隆福宮に居らしめ、⁽⁵⁸⁾翌一三〇八年、更に隆福宮の北に興聖宮という一大宮殿群を建てて皇太后の居所とした。⁽⁵⁹⁾

一三二一年、武宗が崩じて、弟の皇太子アーユルパリバドラが約束通り帝位に即いた。⁽⁶⁰⁾これが仁宗である。武

宗にはフンギラト氏の皇后二人があつたが、いずれも子がなく、イキレス氏の妃がクシヤラKusala(明宗)を生み、タングト氏の妃がトク・テムルTuy temür(文宗)を生んだ。⁽⁶¹⁾これに対し、仁宗にはフンギラト氏の皇后アナシシリ*Anasiriとの間に一子シッディパーラSiddhipalaがあつた。⁽⁶²⁾本来ならば約束通り武宗の子が皇太子になる番であつたが、実権を握る興聖宮皇太后はフンギラト氏の所出でない武宗の両子を忌避して、一三一六年、シッディパーラを立てて皇太子とした。⁽⁶³⁾

一三二〇年、仁宗が崩じ、皇太子シッディパーラが即位した。これが英宗である。⁽⁶⁴⁾英宗は祖母の興聖宮皇太后に太皇太后の尊号を上つた。⁽⁶⁵⁾

武宗、仁宗の両朝を通じて、実権は皇帝ではなく、興聖宮皇太后が握っていた。英宗はこの状況を打破すべく、一三二二年に太皇太后が崩ずると、⁽⁶⁶⁾ジャライルのアントンの孫バイジュBaiguを中書右丞相に任じて改革に乗り出した。⁽⁶⁷⁾これは興聖宮の利権に巣くう旧勢力と真向から衝突することになり、翌一三二三年、陰曆の八月四日癸亥、上都から大都に還幸する英宗の車駕が居庸関の南坡に駐蹕した夜、御史大夫テクシ*Tegeiの率いるアスト衛の兵がバイジュを殺し、続いて英宗を行幄に弑した。⁽⁶⁸⁾

この弑逆に与つた一党といえども、フンギラト派には変りはなかつたが、英宗には皇子がなく、武宗の両子はフンギラト氏の所出ではない。この当時、フンギラト氏の母から生れた皇族といえ、チンギス・ハーンの四大オルドを領する晉王イエスン・テムルしか残っていなかった。そこでテクシ等は晉王を迎立せんとし、⁽⁶⁹⁾晉王は九月四日癸巳、ケルレン河において皇帝の位に即き、十一月十三日辛丑に至つて大都に入った。これが泰定帝である。

泰定帝はフンギラト氏所生の最後の皇帝であった。一三二八年のその死後、上都では皇太子を立てて天順と改元したが、大都ではキプチャク人軍団を率いるエル・テムル⁽⁷⁰⁾テムルがクーデターを起して文宗を擁立し、上都を攻撃して泰定帝派を滅ぼし、明宗を北辺から呼び寄せておいて謀殺し、元朝の実権を掌握した。これ以後、実権は皇帝を去って軍人の手に移り、それとともにフンギラト氏を母とする皇帝も、元の世を終るまで、再び現れなくなつたのである。

以上の経過を顧みて知られることは、『元朝秘史』のデイ・セチェンの言の如く、フンギラト／ウンギラトがその女子を后妃として奉ることによつて宮廷において尊貴な地位を誇り得た期間は、厳密に言つて、一二七三年、世祖フビライ・ハーンがチャブイ・ハトンに皇后の玉冊を授けた時から、一三二八年の泰定帝の死に至るまでの五十余年間に過ぎない。中でもフンギラト派貴族の地位が最終的に安定したのは、その女子所生の最初の皇帝成宗が即位した一二九四年以後であつて、フンギラトの権勢が絶頂に達したのは、一三〇七年のクーデターの後、興聖宮皇太后ダギ・ハトンの時代ということになる。

ここで再び『元朝秘史』にもどると、その大尾、普通の数え方で二八二節は、次のような奥書となつている。
yеke quriltа qurijū, quluуana jil yуran sara-da, keliren-ü köde'e aral-un dolo'an bolday-a silginçes
qoyar ja'ura ordos ba'uju bilkiti-dir bicijū da'usba.

大クリルタが集まって、子の年七月に、ケルレンのコデア・アラルのドロアン・ボルダクに、シルギンチェクとの間にオールドスが駐営している時に書き了えた。

この奥書は『元朝秘史』の著作年代を示すものとして重要視されて来た。但しその子の年が何年に当るかが問題であるが、二七四節に出てくるイエスデル・ホルチ Yesider qorci の高麗出征の年である一二五八年よりは後でなければならぬ。これ以後で、しかもケルレン河上のコデエ・アラルで開かれたクリルタイというと、一三二三年の泰定帝の即位の時しかない。この年は癸亥であって、翌年が甲子である。先に引用した奥書を読み返すと、大クリルタがすでに集まって、それから子の年七月に書き了えた、と明記してある。つまりこの子の年は一三二四年である。⁽⁷¹⁾ しかもその著作の場所であるオールドスは、即ち晉王家の所領、チンギス・ハーンの四大オールドそのものである。

ところで『元朝秘史』は普通、十二巻と言われるけれども、実は『元朝秘史』の本体は最初の十巻、一―二四六節だけであって、二四七節以下は『元朝秘史続集巻一』『元朝秘史続集巻二』と題され、最初の十巻よりは後れて成立したことが明らかであり、二八二節の奥書は、この『続集』に付されたものなのである。『元朝秘史』そのものの方は、その内容がチンギス・ハーンの先世、その幼時から、一二〇六年の即位に至って終っており、歴史上の人物の伝記というよりは、晉王家の奉祀する四大オールドの祭神の縁起といった趣を成している。⁽⁷²⁾ 『元朝秘史』そのものも、『続集』と同じく晉王家において著作されたものと考えられるが、その年代は、カマラが晉王に封ぜられた一二九二年より後でなければならぬ。かくして『元朝秘史』は、その主人公チンギス・ハーンの即位を去ることほとんど百年の、十三世紀末か十四世紀初の著作ということになる。これは一二八六年から一三〇三年にかけて纂修された『太祖実録』と同時にある。『太祖実録』は『元史』太祖本紀の基礎史料となり、その内容は

『集史』『聖武親征録』と一致する所が多いが、『元朝秘史』の物語は独り特異である。

思うに『元朝秘史』は元、明の世に在っては、かつて実録の史書としては扱われなかった。明初の『元史』纂修に際して利用された形跡がなく、かえって四夷館におけるモンゴル語通訳官養成のためのテキストブックとしてしか用いられなかったことを見ても、その重んじられなかったことが知られる。これはそれがともとチンギス・ハーン廟の祭祀文獻に過ぎなかったことが反映しているのであろう。(一九八四年八月二十九日稿)

註

- (1) 『遼史』三十、天祚皇帝本紀四、四葉下。
- (2) 『金史』九十三、宗浩列伝、十七葉上—十八葉上。婆速火は『元史』一百十八、特薛禪列伝、一葉上にデイ・セチエンの姓として記される孛思忽兒 Bosqu であることは疑ない。
- (3) 『元史』一百十八、特薛禪列伝、一葉上—下。
- (4) 同、四葉下。
- (5) 同、一葉下。
- (6) 『元史』一百六、后妃表、一葉下。同、一百十四、后妃列伝一、二葉上。同、一百十八、特薛禪列伝、四葉下。
- (7) 『元史』一百十四、后妃列伝一、二葉上。
- (8) 『元史』一百二十六、安童列伝、一葉上。
- (9) 『元史』一百十九、木華黎列伝、十五葉上—下。
- (10) Рашид-ад-дин: Сборник летописей, том 1, книга первая, Москва-Ленинград, 1952, стр. 93.
- (11) 『元史』一百六、后妃表、三葉上—下。
- (12) 以下に説く元朝の権力構造については、岡田英弘「モングルの統一」(『北アジア史(新版)』山川出版社、昭和五十六年八月、第四章)の第三節「大元帝国」一六九—一八二頁を見よ。
- (13) 『元史』一百二十六、安童列伝、一葉上。但し、ここでアントンが中統の初、年方に十三というのは計算が合わない。至元三十年、四十九歳で薨じたアントンは、中統二年の父の死に際しては十七歳だったはずである。
- (14) 『元史』四、世祖本紀一、六葉下。
- (15) 『元史』二、太宗本紀、二葉下。
- (16) 『元史』二百六、叛臣列伝、王文統、四葉上。王文統

は当時最大の軍閥、益都の李璵の幕僚で、かつその妻の父であった。

- (17) 『元史』 一百五十八、許衡列伝、八葉十一下。
- (18) 『元史』 四、世祖本紀一、二十一葉下。
- (19) 『元史』 五、世祖本紀二、十葉下。
- (20) 『元史』 五、世祖本紀二、十四葉上。
- (21) 『元史』 六、世祖本紀三、四葉上。同二百二十六、安童列伝、一葉下。
- (22) 佐口透訳『モンゴル帝国史3』東京、平凡社、昭和四十六年六月、一二二頁。
- (23) 『元史』 二百五、姦臣列伝、阿合馬、一葉下、二葉下。
- (24) 『元史』 六、世祖本紀三、十五葉下。
- (25) 『元史』 七、世祖本紀四、十三葉下—十四葉下。
- (26) 『元史』 七、世祖本紀四、十四葉下—十五葉上。同二百五、姦臣列伝、阿合馬、三葉下。
- (27) 『元史』 八、世祖本紀五、二葉下。同一百十四、后妃列伝一、二葉上—下。同一百十五、裕宗列伝、四葉下—五葉上。
- (28) 『元史』 七、世祖本紀四、十九葉下。
- (29) 『元史』 十一、世祖本紀八、五葉上。同一百八、諸王表、一葉下。
- (30) 佐口透訳『モンゴル帝国史3』二〇八—二〇九頁。『元史』

元朝秘史の成立 岡田

史』 一百二十六、安童列伝、三葉上。

- (31) 『モンゴル帝国史3』 一〇九—一一〇頁。『元史』 九、世祖本紀六、二十葉下。
- (32) 『元史』 十三、世祖本紀十、三葉上。同二百二十六、安童列伝、三葉上。
- (33) 『元史』 十、世祖本紀七、二十五葉上。
- (34) 『元史』 十一、世祖本紀八、十二葉上。同一百十四、后妃列伝一は、至元十八年とすべきところを「十四年」と誤る。
- (35) 『元史』 二百五、姦臣列伝、阿合馬、七葉下—八葉上。
- (36) 『元史』 六十二、地理志五、十七葉下。
- (37) 『元史』 九十九、兵志二、五葉下。
- (38) 『元史』 一百十五、裕宗列伝、九葉下—十葉上。江南は江西行省に代表される通り、皇太子チンキムの私的勢力圏であった。
- (39) 『元史』 一百十五、裕宗列伝、十葉上。同十三、世祖本紀十、二十三葉下。
- (40) 『元史』 一百七、宗室世系表、十二葉下。同一百十五、顯宗列伝、十葉上。同順宗列伝、十二葉下。
- (41) 『元史』 一百十六、后妃列伝二、一葉下。
- (42) 『元史』 一百十四、后妃列伝一、四葉上。同一百十八、特薛禪列伝、五葉上。

第六十六卷 一七五

- (43) 『元史』一百十五、順宗列伝、十二葉下—十三葉上。
 (44) 『元史』一百十五、顯宗列伝、十一葉上。
 (45) ノムガンはこの時すでに北平王から北安王に改封されていた。『元史』一百八、諸王表、一葉上、二葉下。
 (46) 『元史』十七、世祖本紀十四、二十葉上。同十八、成宗本紀一、一葉上。
 (47) 『元史』一百二十七、伯顔列伝、十九葉下。
 (48) 『元史』十八、成宗本紀一、一葉下。同一百十六、后妃列伝二、二葉下。同一百七十三、崔彘列伝、十二葉下。この玉璽はジャライルのムハリ国王の曾孫シツアイの家から出たというが、こんな怪しげな物が登場する所を見ても、テムルの皇位継承が既定の事実ではなかったことが察せられる。
 (49) 『元史』十八、成宗本紀一、一葉上、三葉下。同一百十六、后妃列伝二、二葉下—三葉上。
 (50) 陳高華『元の大都』中央公論社、昭和五十九年六月、七一、九一—九二頁。
 (51) その機構の詳細は、『元史』八十九、百官志五に二十七葉にわたって記されている。
 (52) 『元史』二十、成宗本紀三、六葉下。同一百十六、后妃列伝二、三葉下。
 (53) 『元史』二十、成宗本紀三、十七葉上。同一百十五、顯宗列伝、十二葉上。
 (54) 『元史』二十九、泰定帝本紀一、一葉上。同一百十六、后妃列伝一、三葉下。
 (55) 『元史』二十一、成宗本紀四、二十葉下、二十三葉下。同一百十四、后妃列伝一、四葉下。
 (56) 『元史』一百十四、后妃列伝一、五葉上—下。
 (57) 『元史』二十二、武宗本紀一、二葉上—下。同二十四、仁宗本紀一、一葉上—二葉下。同二百十四、后妃列伝一、五葉下。同一百十六、后妃列伝二、四葉上—五葉上。同一百三十六、阿沙不花列伝、八葉下—九葉下。同一百三十八、康里脱脱列伝、二葉上—三葉下。
 (58) 『元史』二十二、武宗本紀一、三葉下、十六葉下。同一百十六、后妃列伝二、五葉下。
 (59) 『元史』二十二、武宗本紀一、二十四葉下。同一百十六、后妃列伝二、五葉上。
 (60) 『元史』二十三、武宗本紀二、二十七葉上。同二十四、仁宗本紀一、三葉上、六葉上。
 (61) 『元史』三十一、明宗本紀、一葉上。同三十二、文宗本紀一、一葉上。同一百十四、后妃列伝一、六葉上。
 (62) 『元史』二十七、英宗本紀一、一葉上。同一百十四、后妃列伝一、六葉上。
 (63) 『元史』二十七、英宗本紀一、一葉上。同一百十六、

后妃列伝二、六葉上—下。

(64) 『元史』二十六、仁宗本紀三、十九葉下。同二十七、英宗本紀一、一葉下、三葉下。

(65) 『元史』二十七、英宗本紀一、四葉上。同一百十六、后妃列伝二、五葉下。

(66) 『元史』二十八、英宗本紀二、六葉下。同一百十六、后妃列伝二、六葉下は「至治三年二月崩」に作るが、実は二年九月丙辰である。

(67) 『元史』二十八、英宗本紀二、七葉上。同一百三十六、拜住列伝、十六葉上。

(68) 『元史』二十八、英宗本紀三、十六葉下—十七葉上。同一百三十六、拜住列伝、十七葉上。同二百七、逆臣列伝、二葉上—下。

(69) 『元史』二十九、泰定帝本紀一、一葉下—四葉下。

(70) 『元史』三十、泰定帝本紀二、二十四葉上—下。同三十一、明宗本紀、二葉下—十葉上。同三十二、文宗本紀一、二葉上—十六葉上。同三十三、文宗本紀二、三葉下—十五葉上。同一百三十八、燕鉄木兒列伝、六葉下—十三葉上。

(71) 村上正二訳注『モンゴル秘史3』平凡社、昭和五十一年八月、三九六頁。「泰定帝の甲子のクリルタイについては、たしか三年ほど前のモンゴル学会の席上で岡田英

弘教授によって言及された以外、どの国の学者によっても触れられていないが、……」

(72) Hidehiro Okada: "Yuan ch'ao pi shih, a pseudo-historical novel." *Proceedings of the Third East Asian Alaisitic Conference, August 17-24, 1969, Taipei, China*, pp.194-205. H. Okada: "The Secret History of the Mongols, a pseudo-historical novel." *Journal of Asian and African Studies*, No.5, 1972. pp.61-67. 岡田英弘「チンギス・ハーン崇拜とモンゴル文学」『歴史と地理』一八二、昭和四十五年十一月、二二—三三頁。

『元朝秘史』の物語が史実らしくない点が多いことについては、次のものを見よ。吉田順一「元朝秘史の歴史性——その年代記的側面の検討——」『史観』七八、四〇—五六頁。同『元史』太祖本紀の研究——特に祖先物語について——『中国正史の基礎的研究』早稲田大学出版部、昭和五十九年三月、三五七—三三三頁。

付記 本稿の趣旨は、一九八四年六月、西ドイツWalberberg におこなわれた第二十七回 Permanent International Altaistic Conference における "The Chinggis Khan shrine and The Secret History of the Mongols" と題して発表してある。